

山も、現場も、人も多様でなければ これからの森づくりはできっこない

岐阜県立森林文化アカデミー

川尻 秀樹

●多様な森、進化した森

チャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin) が世に『進化論』を発表して以来、自然界における進化は「競争の原理」によって、環境に適応するものだけが生き残るシステムが働くと考えられてきました。

しかし近年、熱帯雨林の研究から森は競争の原理よりも「共生の原理」が強く支配していることが明らかになり、“生物の微妙な関係は競争や敵対関係で進化するのではなく、共生関係によって多様なものが残る”と考えられるようになりました。

これは熱帯雨林での林冠研究で知られ、共生の生態学の第一人者である京都大学生態学研究センターの故・井上民二教授の考えに基づいています。

●井上先生が言っている「共生の原理」とは

被子植物は裸子植物から分化した1億数千万年前のジュラ紀以来、動物や昆虫、きのここと競い合ったり、助け合ったりしながら進化してきました。日本など温帯地域はその間に何度も氷河期にみまわれ、生物そのものや生物間の進化が幾度も中断され、生物社会は競争的な側面が強い進化を遂げました。

これまで多くの生物学者は、温帯地域での観察結果から植物の社会性を解明しようと取り組み、生物の主要な関係は「競争」だと考えてきました。しかし氷河期の影響を受けていない熱帯雨林では、1億年以上かけて成熟した生物社会を構築してきており、生き残るための多様な共生関係が見られるのです。

生物における共生の生態学は、競争の原理にのみ注目していた時代には見えなかったもので、最も基本的な共生関係はフタバガキ科の樹木で見られます。

フタバガキ科の仲間はアフリカでは灌木にしか成長できませんが、腐植層が数cmしかない痩せた東南アジアの熱帯林では、きのここと共生することで樹高80mの大木にまで成長します。この関係も当初はきのこが一方向的に寄生する関係(競争していた)だったのでしょうが、競争を越えた共生の時代が東南アジアの熱帯雨林では見られ、そこでは“生物間の敵対や競争よりも、共生の方が安定しており、資源が取り尽くされることがない”と考えられるのです。

敵対や競争によって強い者が生き残るのではなく、共生関係によってより多様な者が生き残る。つまり無用な競争を回避するすみわけをしているのです。

●山は、森は、人は

今、日本の山や林業の現状はどうでしょうか？

人家近くにまで及ぶ手入れの遅れた人工林、林業の現場での依然とした重労働と技術者の減少、林内には放置されて利用されない間伐材、いつまでたっても減らない外材依存。

多くの人々は目の前の問題にばかり目を向け、将来の日本の山や森を見据える多様さも、心の余裕もなくなってきています。

こうした問題に立ち向かうには、やはり多様な思想を持ち、多様な切り口で問題に対処できる人材の育成が必要です。

森林文化アカデミーでは、山村づくりから林業再生、ものづくり、木造建築と、山や森、木とかわる様々な分野を網羅し、それに対応すべき多種多様な分野のユニークな教員が人材育成にかかわっています。



▲多様性が著しく欠如した間伐手遅れ林

●「共生」に基づく人材育成

競争の原理は過酷なしのぎあいの世界であり、たとえ生き残っても多様性に乏しい貧相な生物社会となります。現在、競争の原理のみに向けられている目を、一刻も早く「共生」に支えられた生物社会に戻すために、その原動力となる人材を輩出できるよう努力しています。

目の前の「山」を将来に向けていかに多様化できる人材を育てるか。岐阜県の、日本の、世界の森の将来を見据えた人材育成を目指すには、我々自身の感性が多様である必要があります。我々自身に多様性を受け入れる心のゆとりや、思想的な多様さが求められ、これは「競争」を通じた効率だけで見ているのでは、見えてこないものだと感じるのです。



▲森林文化アカデミーでの人材育成例(目標林型を見据える施業プランナー研修)

●詳しい内容を知りたい方は

TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで